

送り火

私鉄を降りていつもの街路を歩くと
ふと近付いてくる
ひとつとふたつのほの明り

ひとつは大きめ
ふたつは小さめ
右や左に揺れながら
街灯のうすみどり色をこちらへと

夏の名残の送り火は
揃いの浴衣を映し出し
ふた子の幼い娘は父親に
少し遅れて手をつなぐ

と胸をつかれて立ち止まる
儚いゆらめきを見送りながら
流されてゆく人の生活（くらし）と
流されまいとする希望（ねがい）と

あやふやな、それでいて確かなものを
僕は見ていたのだろうか
絆という糸の細さと強さとを
薄ぼんやりとした愛の優しさと強さとを

小さなふたつの微笑みが
消え入るように夜の中へ
サンダルのぱたぱたという音を残し
大きめの灯りに導かれ

ひとつは大きめ
ふたつは小さめ
右や左に揺れながら
夏の名残りの送り火は
僕に告げてもいたろうか
人の心の色合いを

(1985.8.15)